

白氏文集 四十四

情に感ず

平成三十一年六

加藤淳平

漢土の詩には珍しき戀愛詩なり。我が日本と漢土、人の外見のみを見れば、一見容易に辨別し難し。されば「日支兄弟論」、「同文同種論」等の言説、俗耳に入り易かりしに非ずや。今は知らず、我若く歐米に在住したる頃、アジア人對象の人種差別、日常茶飯事なりしかば、アジア人の間に互ひの親近感ありしは自然なりき。但し同じアジア人と雖も、インド等の南アジアの人には違和感あれば、多く韓國人・中國人・東南アジア人、即ち「ミャンマー以東」の人々と親しく附合ふ。ただその頃、國聯等の國際會議に、中國代表として出席せるは、當時の「國民政府」たる臺灣政府代表なれば、我らが「アジア人」の中にありて、ほぼ違和感無かりき。されど一九七〇年代に、國聯等の中國代表權大陸中國に移行せるより、事態は變りぬ。現代中國の大國主義と、「同文同種」、「日中親善」如き美辭麗句の亂發に、辟易せざるを得ず。そは、多くの日本人も同様なりき。それより我、漢土と中國への關心より、本格的に漢土の文化を學習し始め、一年間北京に滞在せるを機に、漢土各地を旅行し、愈々切實に、漢土と日本との文化的相違を感ず。相違點多々あれど、最大の相違點の一つは、彼我の文化に於ける戀愛の重要性の違ひならむ。戀愛は日本文化の根幹ならずや。古今集よりの八代集に、戀ひの歌の占むる位置は、言ふも更なり。彼の「もののははれ」とは、源氏物語に漂ふ戀愛の情趣なるべし。されど漢土にありては、北方民族の影響を受けたる元代以前の、漢民族本來の文化に戀愛の情趣少なし。唐詩も然り。李白の遊ぶは、戀愛の情趣とは全き無縁の世界なり。杜甫が詩に家族への情愛を詠へど、戀愛の昂揚無きに非ずや。ただ白樂天に、「長恨歌」に加へ六月の「感情」とこの「感鏡」に、自らの淡き戀愛體驗らしきを詠ふ詩あり。白樂天の、日本人の殊に親しむところたりし、或いはここに一つの理由ありしにや。

感鏡

鏡に感ず

美人與我別

美人 我と別れしとき

留鏡在匣中

匣中に 鏡を留めたり

自從花顏去

花の顔かんはせ 去りてこのかた

秋水無芙蓉

秋水に 芙蓉無し

經年不開匣

年を経たるも 匣を開かざれば

紅埃覆青銅

紅き埃 青銅を覆ふ

今朝一拂拭

今朝 一たび拂拭し

自照顚頰容

自から照らす 自照顚頰の容

照罷重惆悵

照らすを罷りて 重ねて惆悵す

背有雙盤龍

背に 雙つの 盤わたかまる龍有り

(大意) 昔美しい人だった戀人が私と別れたとき、匣に入った鏡を贈ってくれた。その人の花のやうな顔せが去って行つてからといふもの、秋の水に蓮の花の咲くことが無くなったかのやうに、私は索漠たる人生を送つて來た。長年の間匣を開かなかつたために、赤土の埃が、うっすらと青銅の鏡を覆つてゐた。今朝になつて匣を開け、すっかり埃を拂ひ、鏡を拭つて、憔悴した自分の顔を映してみた。映し

終ると、改めて悲愁の思ひが湧き起こる。青銅の鏡の背面には、二匹の雌雄の龍が盤かまる。

(令和元年八月四日受附)